

季寄
註解
改正月令博物考
十一月部
二





十二月部目錄

壬月

卦陰陽生
巽名和名並註

印ハ非諾の本
印ハ季
印ハ



小寒

大寒

壬午童子像を立る

日令

壬子朝日

乙子餅

忌日御飯

御國忌

臘日

臘八

御體御と奏

月次祭

神今食

事始

荷前使

宸勝寺灌頂

御髮上

御佛名

被綿

柏梨勸盃

大徳寺開山忌

小晦日

魂祭



生身魂	前架川神事
飛伊齋宮編馬掛	柳贖物
大枝	米洗
岡見	陽松營
年籠	年守
大年	大節季
除日	分歳
節追難	節分
豆打	福内
扱挿	鬮挿
獲枕	厄拂
吉田大救	厄塚建
五條天神詣	寶松
大原雜喉寐	

月令	煤掃
衣配	札納
古曆	
節季候	星佛賣
年木	年取物
年の市	
餅搗	年忘
寒聲	寒垢離
寒念佛	臘
時令	年内立春
寒	歳暮
歳暮狀	
草木	冬梅

十二月 目錄

△早咲梅 △早梅
△寒梅

△臘梅

△寒竹子

△生類

△寒鯉取

△雞乳

△必用

△養生

△飲食

△煮凝

△寒曝

△寒造酒

△鹿賣

詩

詩 △探梅

詩

△八目鰻取

詩 △鵲巢

詩

此部一、風雨の占破戦の心
日と月と一、他行の心得。此
の心得。衣服の正式。生花正式。天
等をのれ。十二、廿八、廿九、丁

詩 △屠糠の方

詩

△鮑味噌

詩

詩 △寒の餅

詩

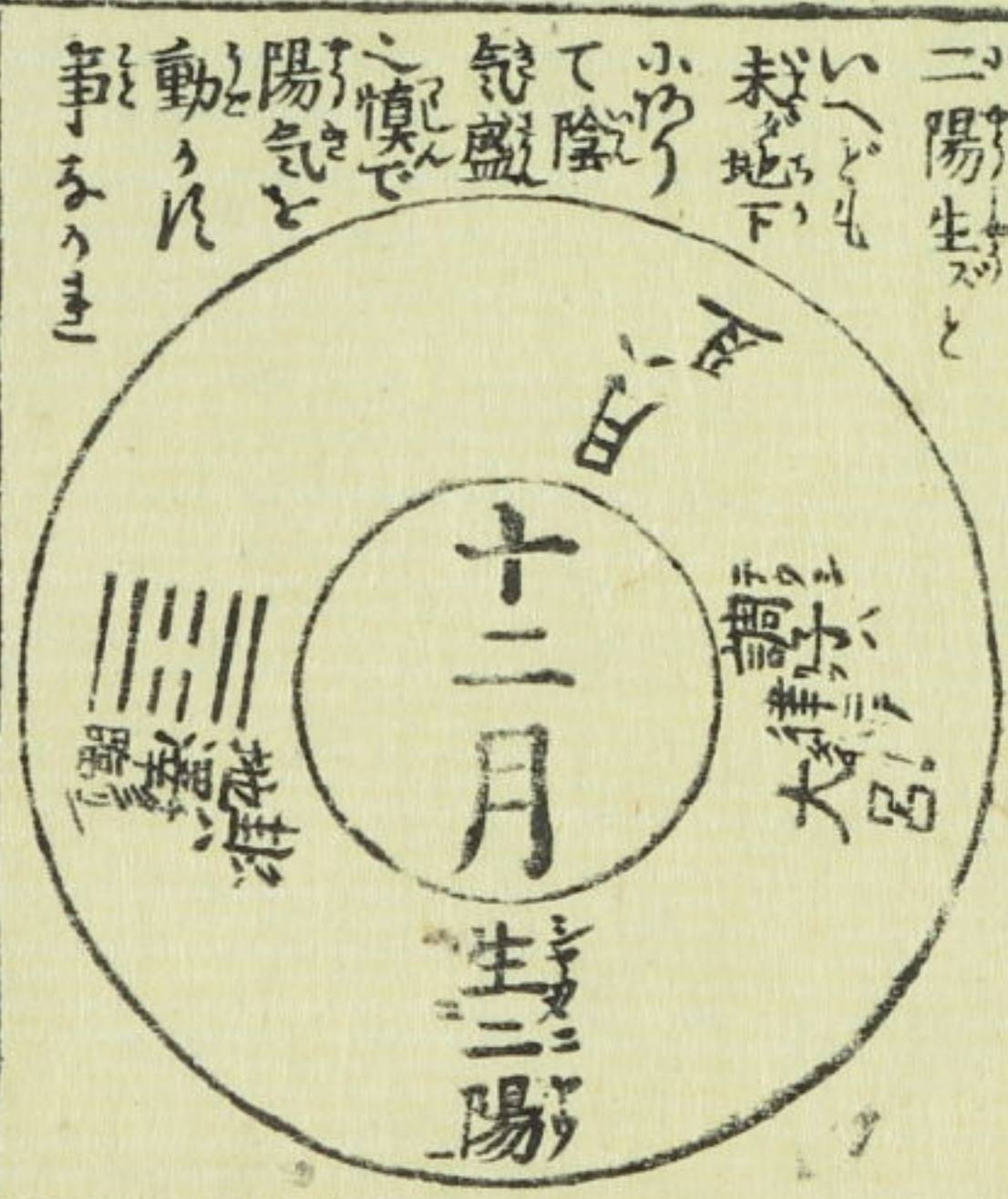
詩 △茶食

詩

正月目録

十二月の部

△印ハ俳の季に
用ひ来る物ニ



調子ハ大呂とハ大呂ハ陽氣出入と
欲して陰これとゆるさるる一
出魂通

○卦ハ地澤臨とハ水澤腹堅とめ
意して陰さく人小開て陽氣泄る

所ふタルバ氣が和せざる由地澤小
臨人く氷とらしむる意一月令に出る

十二月

△臘月 唐書の主嘉平月 史記△季
冬礼記△涂月 雨雅△窮節 類延

○急景文集△般正 暮寒△暮冬 留精
抄冬唐詩△二陽月 異名

莫傳 七や二月

りま人のこたはをばつる親も月
ねやいのちのためーるまらん

非 公あつ師を卓小枝密相 鴉谷

七 結の仲るに唯る時きふ 冠里

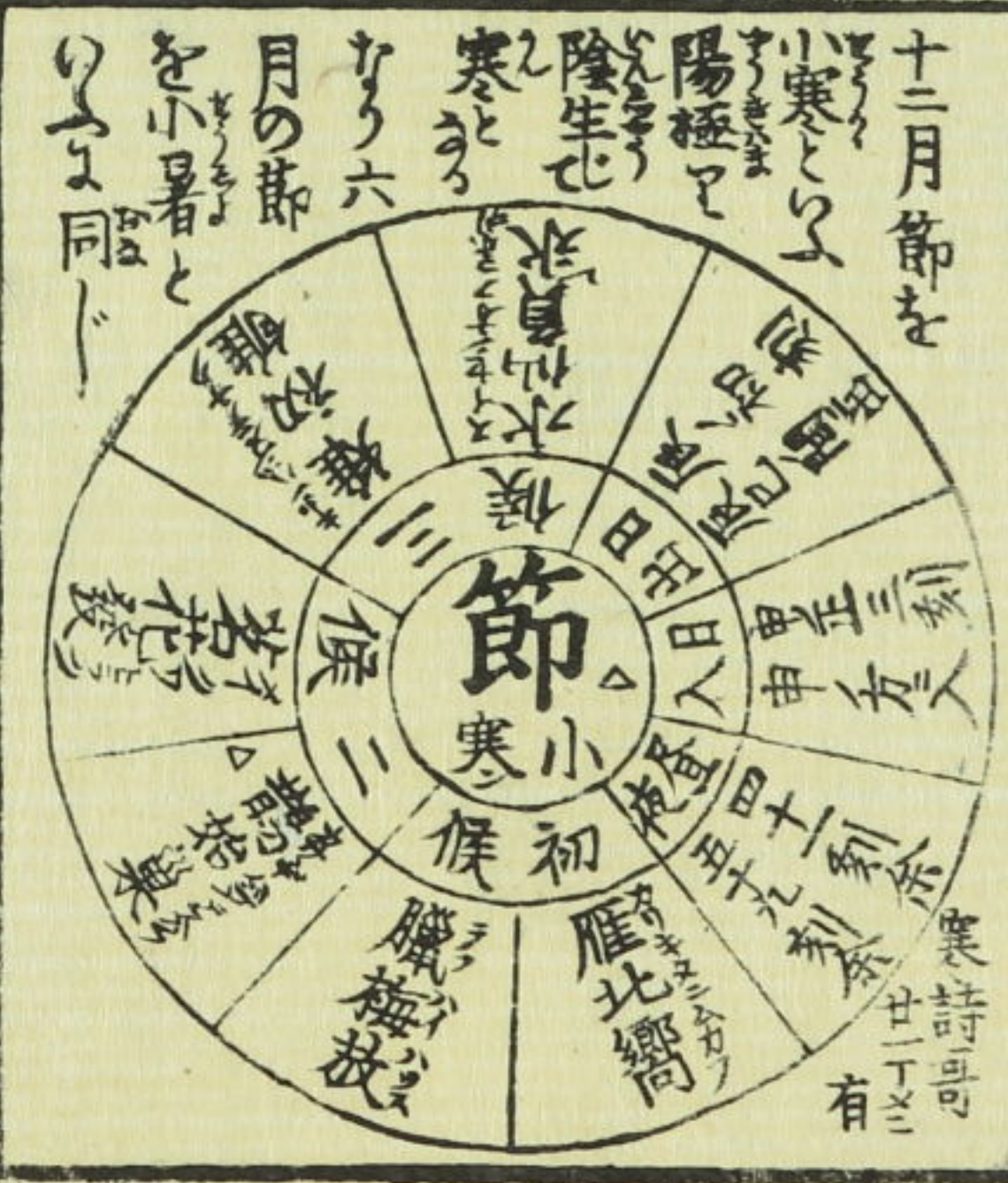
五 幸も状とかけて師きふ 石貞

積 板をまよお月のおまき 隠乙

扇 ねく後よ師まけ巨燈うぬ 積雨

狂 正月の樂をまきんきひくもど
牙子も師をの打てる家らん 家蔵

小寒 節の名七十三候。草木七十二候
昼夜長短。日出入等左記に



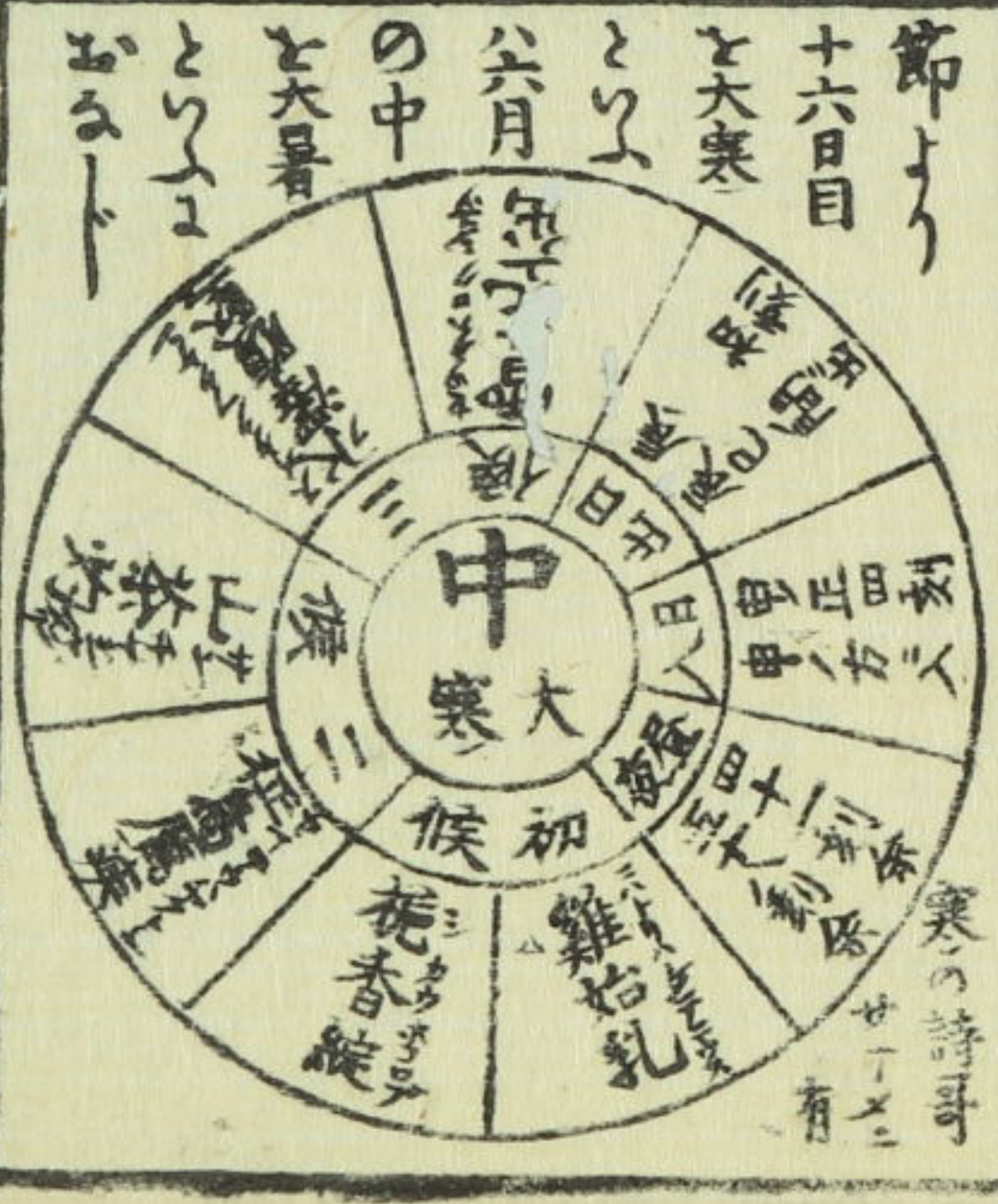
十二月節を
小寒とす
陽極を
陰生を
寒とす
かう六
月の節
を小暑と
りよ同一

雁北嚮ハ陽ノ傾ムて北ノ歸ル月令
の註あり。臘梅放ハ此頃咲ル。臘梅の
譯ハハ丁小委。鶉始鳴ハ鶉ハ木を
叩て鳴ふと詩にも多く作りたるあり

此頃の陽氣小うして始て葉を定る。若花
發若花ハ茶の花。雉始雊ハ月令の注。雉
火畜る。陽氣の感して聲を出て有。水
賃氷ハ水仙の花氷と負かす立のひる事

大寒 中の名七十三候。草木七十二候
○昼夜長短。日の出入等左記に

節より
十六日
と大寒
と大暑
と小暑
と小寒



○雞始乳と八月令の註ハ木ニ屬する
畜類ハハ陽氣うつき後形あり

い事とらり乳の字をつらむとまされ
れが陽氣に催されてつる心事をよまらば

○挽香綻とハくらましの花のひらく事あり
○征鳥鷹疾とハ鷹のこげくまるといふ

○山茶灼とハつてはの咲かるといふ。水澤
腹堅とハ水のあつ澤の水が上下とも張

つめる事とハ雪花六出とハ雪の花が六ひら
つるの也ハ雪のまきりに降る事なり

大 天氣 東風吹ハ晴天冬土用
寒むれハ来生六月ひてり

大 土牛童子此像と立。文武
天皇の

三年十二月ハ天下疫癘よくく
とらる者多うりしハ禁中ふて土牛

をつらうく儻とくはらひをさせ
まつり。唐土とも土牛此像をつらう

て国々の郡縣ふたて寒氣とは
らふすいまひととらる事なり

日令 此部ハ十二月一月の月日定と
なる事支の定とらる事をさるい

朔 乙子朔日。物の始を甲といひ
未とてしとて一故終り

の月の朔日ハ乙子といふなり
○非 月月のいふらうれを柱 凡東

乙子餅。弟子餅とも書く
今日餅を食ふハ年

の間無事にくらり今日朔日の
終りたる事ハ元日ハ餅をいふ

ふまらひく今日もどらうべし
○又一説今日ハといハ唐土ハ臘

の祭の餘風ともいふ
○非 乙子臘まといはしう食也 宗目

川浸。川つらり麻。今日の餅は
食の時ハ水難さのどろと江戸

ふハ専らといへも今日ハ川とつらうとて
深き譯ある事と委しくまら臘の祭論有

朔 忌日御飯。季ハ六月といハ六月
季ハ六月

二 今日沐浴とてしハ火をさる
日 京太秦佛名會今日なり

日 京太秦佛名會今日なり

三 御國忌 今日天智天皇御忌

寺にて行つる崇福寺の昔の志賀寺と

中世三井寺に移りし由也今ハ舊

跡のそのこまろ天智天皇ハ聖天子

御國忌といハ此君の事なり

卯上 大 大神祭。卯辰の酉日

子 今日 筵又ハ墨の表を日にか

六 不成七 此日遠く行な

日 臘日 委しき譯ハ 臘ハ 唐土にて

八 温槽粥 臘ハ粥。秋尊今日曉

五山にて粥を製するなり所製衣の粥

唐土も此日寺々少くはくハ加藥

八 今日竈の神を祭ルハ大ハ幸い

の神はくはまきく見へり子方是

羊らしを以て祀るはバふら

八京。智積院ハ論議院のく

日 妙藥 今日の水を貯へ明年

万病を治れ。此水よく丸薬ハ

製方とる時ハ大ハ妙なり。今日

の水と燈心を浸して明年火を
ともせば職皆去る廣義と出り

十日 御體御奏 月次祭
季六月

十一日 神今食
季六月 右御體御、月次祭、
神今食ハ朝廷公事

よて六月廿三日 西度行ハ、
六月の條小記し侍る尚委ハ補遣出

二十日 山 南禪寺大明国師忌日
城 妙心寺開山忌 博物茶茶委し

三十日 事始
大臣以下正月の行司を

定む又天皇元日の御装束等と辨
備を。民家も今日より正月の

入用の品試々の用意をなすと
煤拂おなくハ今日とるなり

非 ぼくも又慶候事始 鷺水
奉始もろくも人々死 杉風

狂 のどうも正月のけつわね
せらく氷の解ともせよ 政長

三十日 荷前使
昔十陵八墓を定め
られ其所へ勅使幣と

奉るひいといふ荷前ハ初穂と
よして神に奉るといふ義ハ十陵と

いふ御代々天子の陵十ヶ所ハ墓と
いふ親王大臣方の墓八ヶ所なり此

事ハ崇神天皇より起りて四
季物語より出り尤勅使ハ吉日に

撰らるるも今日ふ定むといふ
非 内院ハ電えては元十陸使 野史

十四日 不成
今日より十六日まじり
就日 泉涌寺佛名會

十五日 無病
今日沐浴し身と清むれば
諸の災いとあくる

十五日 最勝寺灌頂
今ハハし普跡
ハ岡崎より

灌頂の事くりくま俗佛事篇
といふ書あり面白きことなり

中 御髪上
蔵入御髪の梳り
膚を賜り主殿宣

人松朋を献し焼く上臈ハ
ぬけたる髪を箱に入置此日ゆき
て灰小沈香を和し器に入ま
よき地こつひの説下午もい

御佛名 名だいらん。雲の
上人名乗ころくと

御名を唱ふるなり三世の諸佛の
御名をとらまは作まる罪を
雪しころも消るなり哥おも歌り

林裏十九日十九日廿一日まで
行り仁壽殿の御本尊を移し

て御帳の内よりけ佛前ふ香花
底に地獄の画の御屏風をたて男

女も佛名を唱ふ。名だいらんとり事
ハ佛名終て殿上人各名と名乗るなり

哥 三世の作のは名とまゝるあは
つともやこよひのころまらん 俊頼

千首いあはのかたあまていとも
佛の寺名や終のころらん 師兼

非 風俗くみみ池獄も屏風ハ 曾風
佛名也まゝ宗貞の附もこと 疎松

狂 地獄の終るてにぐく佛名も
ヤさぬるとの極おらう 來中

被綿 佛名の導師の僧も賜へ
藏人ともく僧は君かたを

哥 堀川次郎百首

おつけたるわささきうよおさけく
じとくつらんせうかして 俊頼

非 寒風お切きき言うつげ宿 蛙舌

柏梨木勸盃 昔摂州柏梨と云
地を左近衛府ふ

よせうり 此官府ふ其柏
梨れ地の利分と以く酒を造り
ふるトく佛名の夜ふ飲宴とこれ
をかちちの勸盃とハワヘウ

世山 嵯峨秋迦堂とくけしん
日城 本尊開帳あり

世 今日病人と見舞ふ事ふまき
日 必つつこ。根川端へ行とまら

不成。今日房事をししは
就日三年の壽を延ぶといふ

日二廿 不成。今日房事をししは
就日三年の壽を延ぶといふ

日二廿 山 大徳寺開山忌
今宮は南紫野より開山

を大燈國師とし延元二年壬午廿二日寂
非 系入宮ゆりゆりは六體忌考井

日三廿 上人の忌日。時宗の寺小
不殘法事より博物筭小委

日四廿 照虚耗。今日床のわらひ灯と
照せぬ食をなして富貴を

日四廿 灶神送。今日清の世は今日灶
神天よ上つてあつて日ち

とく家々灶神の札は供物と云
禮拜一神を送ると云て其札を燒す

てるといふ又正月九朝小神を迎ふとて
新ふ灶神の札と張りく物と備へ祭る

日四廿 占候。今日米の飯と碗と盛
かまど小供まじり家内安全

ちりして来年の事と云らうと云
うの供へる飯をうちつけて見るべ

碗よりほいあまこ来年よは
ほどよ雨ふりくさりににら

と雪のたつ不どぬまてあつと
来年大水出ると云とれりひ乃

外碗の底かこぼくらくと来
年大ひでりなり

日八廿 鉢町結頭。極樂寺の本堂より
踊念佛らう。結願と云と云事

日九廿 小晦日。明日と大晦日といふ
由へ今日をかきいひ

日 魂祭。今日はき入の来り夜とて
たよ祭をなして無思無出

昔々今日もぬくく七月の條よ委田舎
よハ祈より今日祭ると非ふ公暮の

魂祭と云又ハ冬は素物結びて
非 魂祭と云へるハ祈 立雨

日 哥。夫木をたててあつて
家とむゆりやまの里 和泉式部

生身魂。両親又ハ親族の存生乃
人と別棚をふつひ祭る

生身魂。両親又ハ親族の存生乃
人と別棚をふつひ祭る

生身魂。両親又ハ親族の存生乃
人と別棚をふつひ祭る

田舎に其風儀今ものこれ七月の條に委一俳は夕の景物と結びく季くさるる

俳 こともしる巨燈てなれきりて州

晦京。祇園神前大般若經轉讀

日都 同子刻まうけづかけ神事なり

晦豊 和布刈神事 今夜丑の刻 社人帯剣也

日前 鎌を持松明をいけ海底へ入るとは潮水左右に開きていけいけ和布を一鎌刈取く元日神前小供とて

早鞠の社といふ昔此所長門国に属し

神功皇后の時より豊前国に属し

俳 踏枝さふと人の下布和布刈の枝荷雪

狂 和布をかきて汁へまきまみさう

伊勢 齋宮繪馬掛 伊勢齋宮村の森小祠あり

日勢 今小に繪馬を掛く其繪ハ楡と砂金袋の繪を書向ともなれすだけ

おく昔此所は齋宮あり其時ハ今日大袂ありて繪馬を奉し齋宮の儀式絶く其例より繪馬を掛る

よや。又今夜繪馬を掛る事行疫神と宥むることをいふ増山井に出さう

俳 袂の画るをた掛る空山 柳水

御贖物 公事根元は六月同しとありまは六月乃

部ハ世日よゆに註ハ四世かりし

けと指し上ふさうたる紙ふ穴

をあげ御いきは入る弘仁五年六月より御藥の事よては

御贖物奉る大くハ素蓋鳥尊の千坐置戸の被やといさう起す

ぬる事さうま。按るに根源の説おつらうとさこのつらう

おきくさうおさるはこれ其罪と贖ふ。かのさうひの義天子乃

息を令らるゝハ御罪をよきことし
て卅日の積よきことせむ御
代の心よおるドかゝるをよきこと
西月とも卅日はくひの御よき
かゝるべし

卍 一息の匠渡船中よ代のを待。荷風

日 大被 卍 二ヶ六月の條よ妻
素能

米洗 卍 卍 餅米を洗ふこと
一説よ九日ふ心長閑ふ樂んか
為米を卍日洗ひ野へ置ともいふ

卍 米ゆひわとてきくおるよ 管月

日 岡見 卍 今夜子の刻高き所ふの
東の方を見て朦々霧

の如きハ明年凶又明らちある時と明
年吉ハ又今夜高き岡よ登て簑逆
さまに着て遙よ我家とこれハ明年
あつべき吉凶見へると 温故日録よ出

哥 夫木 山 夫木 山 夫木 山 夫木 山
俊頼

卍 野田因義よはたる冬んハ夏井
松井の色とをええる岡んくやハ 可水

日 門松營 卍 門松立るハ卍門松立る
ととやゆけおたり梅指

哥 夫木 山 夫木 山 夫木 山 夫木 山
堀川

堀百 門松立るハとつとつとの花に
まゆふねハわくわくハん 顯季

年籠 卍 伊勢大神宮ハ此夜も
こも元朝神拜とよん

一説よ伊勢大神宮へこもるばら
ゆきもあつとらふふ

哥 夫木 老らくのかききんくらまののち
とらふとハとらふとらふと 信實

此哥の心おてハ守歳と同一意なり
卍 年籠もつとらふとらふとらふと 言帆

日 年守 卍 守歳。今夜いねとて
春をひくることハ東坡

日 大年 卍 大年日。年のことハ大
の字ととらふとらふとらふと

卅 大節季 掛取(卅)掛も(私)を
えせん掛の花 免涼

○掛取ハ雜もいへ。大年大晦日大拂
のりけ委一く日本歳時記拾遺に

出く此書ハ字義を正し諸書の
故事を引き面白論あり見ふべし

卅 除日 除夜(卅)除夕(卅)除ハのどく
とよじ字ゆく今年(卅)のぞ

○除日詩哥在記ハ尚歳暮の條(卅)に
きまこく来年(卅)のぞ

哥 御集 伏見院

拾遺集 源重之

詞 夕の夜(卅)あらしや花のま
ふり方(卅)表と(卅)ち(卅)大(卅)三(卅)百(卅)竹(卅)川
天(卅)三(卅)十(卅)日(卅)琴(卅)の(卅)ま(卅)め(卅)む(卅)の(卅)夢(卅)湖(卅)春
了(卅)も(卅)く(卅)と(卅)大(卅)年(卅)の(卅)市(卅)比(卅)也(卅)の(卅)後(卅)半(卅)窓
天(卅)卅(卅)日(卅)や(卅)つ(卅)て(卅)底(卅)ぬ(卅)け(卅)ぬ(卅)の(卅)川(卅)連(卅)孤
二(卅)れ(卅)く(卅)く(卅)大(卅)晦(卅)日(卅)に(卅)ま(卅)て(卅)ま(卅)ま(卅)ひ(卅)紅(卅)素
狂 ま(卅)め(卅)ぬ(卅)世(卅)の(卅)ち(卅)り(卅)る(卅)は(卅)な(卅)ら(卅)ぬ(卅)と(卅)ら(卅)ぬ(卅)と
い(卅)ふ(卅)ら(卅)ば(卅)ら(卅)ぬ(卅)の(卅)ふ(卅)き(卅)り(卅)は(卅)な(卅)ら(卅)ぬ(卅)と(卅)ら(卅)ぬ(卅)と
貞(卅)左

連 ぬ(卅)い(卅)な(卅)と(卅)お(卅)い(卅)な(卅)る(卅)年(卅)の(卅)暮(卅)紹(卅)巴

非 降(卅)て(卅)年(卅)ち(卅)越(卅)人(卅)老(卅)の(卅)後(卅)支(卅)考

子 子(卅)の(卅)一(卅)夜(卅)あ(卅)ら(卅)し(卅)や(卅)花(卅)の(卅)ま(卅)分

方 方(卅)方(卅)表(卅)と(卅)ち(卅)ち(卅)大(卅)三(卅)百(卅)竹(卅)川

天 天(卅)三(卅)十(卅)日(卅)琴(卅)の(卅)ま(卅)め(卅)む(卅)の(卅)夢(卅)湖(卅)春

了 了(卅)も(卅)く(卅)と(卅)大(卅)年(卅)の(卅)市(卅)比(卅)也(卅)の(卅)後(卅)半(卅)窓

天 天(卅)卅(卅)日(卅)や(卅)つ(卅)て(卅)底(卅)ぬ(卅)け(卅)ぬ(卅)の(卅)川(卅)連(卅)孤

二 二(卅)れ(卅)く(卅)く(卅)大(卅)晦(卅)日(卅)に(卅)ま(卅)て(卅)ま(卅)ま(卅)ひ(卅)紅(卅)素

狂 ま(卅)め(卅)ぬ(卅)世(卅)の(卅)ち(卅)り(卅)る(卅)は(卅)な(卅)ら(卅)ぬ(卅)と(卅)ら(卅)ぬ(卅)と
い(卅)ふ(卅)ら(卅)ば(卅)ら(卅)ぬ(卅)の(卅)ふ(卅)き(卅)り(卅)は(卅)な(卅)ら(卅)ぬ(卅)と(卅)ら(卅)ぬ(卅)と
貞(卅)左

卅日 分歳 唐(卅)土(卅)ニ(卅)ハ(卅)大(卅)年(卅)ノ(卅)夜(卅)元(卅)祖
ヲ(卅)祭(卅)テ(卅)家(卅)内(卅)打(卅)ミ(卅)リ(卅)舞

宴 宴(卅)ヲ(卅)ナ(卅)シ(卅)金(卅)銀(卅)錢(卅)ナ(卅)ド(卅)ヲ(卅)家(卅)族(卅)奴
婢(卅)等(卅)ニ(卅)贈(卅)ル(卅)ヲ(卅)云(卅)ト(卅)ソ

萬年糧 唐(卅)土(卅)ニ(卅)ハ(卅)大(卅)年(卅)ノ(卅)夜(卅)米(卅)洗
ヒ(卅)籠(卅)ニ(卅)ツ(卅)ニ(卅)米(卅)一(卅)飯(卅)ヲ

燒燈 此(卅)夜(卅)院(卅)々(卅)ニ(卅)燈(卅)ヲ(卅)燃(卅)ス(卅)ト(卅)カ
白(卅)彫(卅)ト(卅)イ(卅)ハ(卅)リ

設火山 階帝除夜每殿前諸院
火ヲタク事山ノゴトシ又

コレニ沈香ヲタキテ火光暗時
彫焚ヲ以テソク香數十里ニ及ブ

一夜ノ間沉香二百余衆ヲ用ニ彫
煎二百石ニ過タリ階書ニ出

醉司命 都人除夜ニ至テ僧ヲ
請ヒ看經シ酒菓ヲ

備テ神ヲ送ル合家簪ヲ燒テ紙
錢ニ代ヘ竈馬ヲカドノ上ニハリ酒

ノ糟ヲ以テ竈ノ門ヲ塗ルナリ是
ヲ醉司命トイフ事文類聚ニ出

除夜 吳騷

老稚均欣一載安 一モヒトツニコトシ
一年安ラカニ暮シ 低吟 曹共盤

桓 分ウタヲウタヒヨイホドニ酒ヲ
ノシテニクニルリトシテ井ル 瓦瓶春

透屠蕪暖 氣カトツタカシテトソノ
酒ニアタ 石鼎香銷柏子寒

掌 一世話カ多ヒケレド 那知天
運又更端 トキノニハリアハセハシレヌ

迎新送故須更事 アタフシイ春
トシヲ送ルモワカ ノ間ノコトシヤ

不倦挑灯坐夜 夕テ夜ノケルニテスハツアサル

除夜五字對句 同上

夜將寒色去 今宵光景舊
ヨルハサグイケシキヲモツ コヨヒノケシキガモウ

燈向曙光新 來日歲時新
トモニモアカツキノヒカ アスハトシモキモア

除夜七字對句 詩楚

晚景莫追窓外驥 一夜去
ハシケイオホレオウサウイキ

春風不染鏡中絲 五更來
ヒカゲヲオフトコトヲスナ

春風不染鏡中絲 五更來
アスルカセハカニニウツシラガ

春風不染鏡中絲 五更來
ラソタテモクニイケレド

春風不染鏡中絲 五更來
ガクル

節ついで追お難がた 鬼おにやらひひななややららひひのの鬼おに

追おももいいふふ昔むかし八や世よ日ひにに夜よ

追おここららふふ之こ疾はや鬼おにととハハ邪よこしま氣きをを指さししてて

ららひひ為なのの義ぎ其その鬼おにとと名なづづくく者もの熊くまのの

皮かわをを冠かぶてて鬼おにのの面おもてをを着きてて黒くろきき衣いにに

禁裏きんりのの四門しもんにに立た其その時とき陰陽いんやう寮りやう祭まつり文ぶん

ととよよここ上かみ卿きやう已お下しも桃もものの言ことば逢あひあひあてて

これこれをを追おひひ射やるる世間よこしま問答もんたうよよ出いでで

○なややららひひのの事ことハハ源氏物語げんじものがたりにに出いでで難がた

ややららひひのの事ことハハややららひひとと追おひひとと云いふふ云いふふとと

寄夫木

前大納言隆季

五いのの重かさねののううららりりややららひひのの事ことハハ源氏物語げんじものがたりにに出いでで難がた

家集

貫之

鬼おにやらひひのの事ことハハ源氏物語げんじものがたりにに出いでで難がた

追お難がたのの杖つゑ鬼おにのの女房にようぼうハハ添そ乳ちち也なり 孟弓

鬼おにやらひひのの事ことハハ源氏物語げんじものがたりにに出いでで難がた

狂くる也なり鬼おにのの目めもも目めツツののゆゆめめててくくははららふふににけけきき即すなは代た信のぶ舊ふる

詩 宮詞 王建

金吾きんご除ぞ夜よ追お難がた名な畫え袴はかま朱しゆ衣い

四隊しだいて行ゆ 金吾きんごハハ鬼おにやらひひにに勤こまメメノノ宣のたま名なナナリリモモ

ナリナリテテ鬼おにやらひひノノ院いん々々燒や燈とう如ごと白しろ日ひ沈しず香か

火底かぞ坐ま吹ふ笙しょう 役所やくじよノノ二に火かララタタキキ燈とうヲヲ

又また禁裏きんりノノオオモモキキハハテテカカナルナルモモニニテテ其その中なかニニ

節分 儀式 鬼おにやらひひハハママシシ豆まめ

いいららきき。宝舟たからぶね厄拂やくはらひのの事ことハハ昔むかしハハ

晦日くわいじつヨヨクク有あるるもも晦日くわいじつのの夜よハハ来き来きハハ

年としののよよけけふふ事ことハハげげきき也なり中なか世よノノ右みぎ等らのの事ことをを節分せつぶんのの夜よハハとともも

尚なほ委あやししたたけけハハ年とし中なか風俗ふうぞく考かうふふ出いたりたり面おもて白しろのの事ことハハ見みるるべべしし

豆打 △爆豆 △撒豆 △福ハ内△
鬼ハ外△禁中ニも熱豆と

撒しく疫鬼をばらばせらるる
事宇多天皇のときより始る民

家も豆をうらう福ハ内鬼ハ
外と雑どなり豆をうらうハ

来る年の起し當る者つゞき
を年男といふ又豆と打事ハ魔鬼

目瓜挿といふ義ハ風俗考ニ出
○唐土も今夜赤丸と五穀とをく事後

漢書の註より出り赤丸といふ事
○非 豆をとり免ふといふ事 其角

刃背や口の内ての鬼と外了兩
鬼子達より附のる鬼ハ外 来山

松挿 △松賣。冬も青翠ありて
貞を守り操りて

○世俗ニ門戸ふこいて目つと鼻
つこと同トく鬼を追ふ之神代巻

にいらいき此挿のまことゆりこの縁
ふよふや

鯛挿 △鯛此頭さげの井クシサス
△なより此頭さげのいさしの

かいらの疾鬼邪鬼のきくふるの
ゆへ今日さげなるべし。土佐日記

節今の條より曰なりのかいら
ひいらき飯小家の門よりさげといふ

事ありなるやハ鯛の古名と思
る然まども勢州よりハ鯛乃

魚となよりといひ名吉とも呼
いびまう是は事はさげなるは

○井クシサスとハ節今の夜鯛の頭
を門よりさげをいふ吳竹集ニ出

○世の中ハ救うはれもいひつるの
をいひつるもいひつるもいひつるの

○非 子の緒の文書ハも字松雅
松は守るふ前ハ茶師の妻也鳳

○狂 枕 豆ておめかかれうさ
わめつ下よりいひつるもいひつるの

貊枕 △貊の札。白澤といふ獸乃
幸へ白樂天ハいつり節分

の夜獺の圖を畫く枕とこれハ
悪夢を見れば諸の邪鬼と避る事
妙之俗は獺ハ夢を喰ふ獸といふ
いれり依之左の獺の正像を出し

○唐白樂天獺屏讚曰

寢其皮辟瘟

圖其形辟邪

今謂之白澤



○五法水にて寫したる此御像と家ハ
所持とれば時疫や病うつらば
狸惡氣其外諸の怪しきを火
をさし事なり一萬一怪しき事あり
う又ハ怪しき病人ありば此白澤
の像の前より呪文を唱ふまは
まいげん神の如し近世ハ大坂古文
字屋市左衛門といへる本屋にて五法
水にて寫したる此白澤の像と賣り世
間ハ守札と違ひ涉世錄其外諸書

み出く正しき事なり余も此像

を家にうけて凶事の吉事となり

たる事多し依之諸人の為りに記に

俳もしもよに友らうらう小猿松 藝園

狂 ともあう浮世の妻と縁あり

厄拂 門を厄拂いませよくと

て乞人の通うる其者ふ少しれ錢を
与ふまは俗なる祝語とて入ゆる京

大坂やぐ専らゆる事と田舎ありあり
国よりて今夕毎家ハ社へ來て後

とこの所もつる是ハ禁中ハ廿日ハ行ハ
る大坂の余風とて厄拂の事奇

にらるの沖へつてこつハ素盞鳥
尊に千うけ置所ハ物とて拂えし

め其千うけ置所とてこれ沖とて
下ハ祇園はつらけの夜やも身の厄は

拂は今為何らるものよても我身ハ添ひ
たる物とて道ハ落し歸らるる

セも同心心。令厄年逆慎し譯さるべ
ふ厄の之け委し日本歳時記の出
歳時記拾遺

⑤ 非 咄たる信令今より厄はくハ 貞雌
下よりしや進排星一厄排 怨由

⑥ 狂 七言をさるとして何よりさると
やうもたぬやくと排へよ 駄足

京 吉田大夜 節分の夜ト部家吉
都 田の齋場内陣わく

後を修行式ハ正月十九日清夜と同
ト。又節分の朝ト部家宗源殿にて

神道護摩と修ト疫神齋札三
千枚を出以諸人受く門戸貼る

△ 厄塚建 節分の夜吉田神祇宮
く行ふ、其式庭上り塚

を築く祭文をよむ是を厄塚建
るといふ正月十九日此塚を取拂く

といひ正月の條よ見るべし

⑦ 厄塚も空う塚たり排るよ 桐上宮
京 五條天神詣 勝の餅 白虎賣
都 節分の日八林示重衣

白求小餅 寶船を上る。節分此夜
諸人参詣して右三つの物とりて

白求心家ノ歸アテ焼く白求と焼
邪氣百鬼と辟くといひ小餅白求

とも舊例ふよりは是と責む
近世ハ其料物と社司よりて製せしむ

○ 小餅を勝の餅と書くハ小と勝と同
音也ふりし。此餅ハ社他の内勝

軍地藏尊に供る餅也ふり。節分
⑧ 非 多のせてとく小産を勝の味 虫戸

寶貝船 紙空舟比繪と書く節分
の夜人の寝る床の下に敷く

○ 或人のいづく寝、いねく我を稻と
て舟に積りて心さるる除夜明か

に人のせらむむはいねつむのふ同ト

⑨ 非 足括していぬきいこそ宝舟 看月
厚手平

枕妻と二人床やなうやの 半窓

⑩ 狂 たりと縁たこれともさるとも
おもね風の夜の神とや 捨替

節 **大原雜候寝** 山城国大原江
文明神の祠へ

野に男女黍詣通夜して夫婦乃
かゝりいそむけとて山州名勝志

曰昔蛇井出村の大淵より池小大
蛇住む時く里小出く人とさら

んとと西へは蛇出ると蛇を男女
一所より川より卧してかゝり

るれを大原より浮とりてこの事
よりおこりて其後ハ節分乃

夜産沙神の拜殿より通夜を
とむ

非 せめてもの鼻て目利のこねは鬼貫
不様ぬた九日もある雜候ぬ文人

狂 よい程のくろくろとあむい
ふくくさる後う大原のくく 遊糸

月令 此部お八十二月一ヶ月の
日の定まりたる事と記し

煤掃 △こまはき△こまこま
△こまこま△こまこま△こまこま

せり事ハ百姓ハ春ハたがやハ夏
くさきり秋収む冬のみ其暇は

得く一年よつとも煤をくく
て春を迎ふるいへんはくくハ

せあり又内裏の煤とくくハ陽成
院の御時とて人此事をせる公事ハ

あはば 聖物語よの家の煤の疑る
繁昌とす神代卷大已貴命國讓の

文中のゆりの唐土も掃塵とらさ
此月とくはくくいをなると見へり

哥 かけらきや外山のここのあは
とれまのやもはくくくく 經行

非 ともて何とても恐られん
とくはきくくくくして仕なかり 全

狂 くくくくもあ甲て出よす
ふくせのねもかこりかゝりハ 樂水

衣配 ○源氏玉つれ巻ハ衣
の事あり其文ハ書ハ

きハ年れこれ人々の装束ハ
おこよれくくくくくくくく

おこよれくくくくくくくく

くちろきぬを御覽トていと多かりの
る物もかくく恨さぬやけくもさ
事として御衣櫃箱も入させ多くて
これにかまひことして入るも有ること
くふ衣をさぐりたりたり源氏の
たりのみまさせたり民間にも親屬奴婢
わびふたりゆりまさせ處物も
こみきぬくばらり

⑤ 園宮
衣をさぐりたりたり大立

⑥ 狂
これくふを配このきぬくばらり
一これらゆりまさせたり 松花

札納
門戸ははりたり寺社の札
くくおさむるなり

古曆
曆の末△巻はつる曆△巻納
曆△右△巻を曆

⑦ 新六帖
二と名の曆れはくふ色させ
くのる日敷のむもさくら 知家

⑧ 能
やうじき日と日と古曆 良道
麦のふり馬のおれ二三寸 道風

⑨ 狂
馬ていゆともせぬとけく川の
おのまこの月もやうくは 流霞

節季候
△姪等△乞食がかりに
裏白をさくさくして

家くふ来く節季はだいくと
りて米ををふだいくはだひく

乞食の言やうべし昔は赤き織ふ
う頭面はつこく烏帽子を着たり

とこの姥等△乞食の妻など同く
白毛緬顔をわくみ赤前がれせ

自婆寺といふく米錢をさく此
そこの京師よのこ出る

⑩ 非
いの付く食季ともぬかり馬尉
まゆいとおりてまゆり食季は蜂房

⑪ 狂
夢たぐり世よふ坂のせきひくと
通つてやまゆいといふやうー負柳

星佛賣
年初おき其年の曆星を
禁中におき奉る御修法

あるは正月十二日佛師来年曆星を
の像を造て禁裏へ奉る民間ふる世に

とらば(来羊)の属星と改行して賣物者
の属星と云ふ九曜星と人の五性(配)

て毎年の属星(まはる)の九曜との
日月(木火土金水)羅計都合九星也

年木 △年木熊(内裏)新(上)の
御(高)木(とて)早春(これ)なるに
みつ(お)まて(な)り(木)と(た)稱(は)其(木)
を(き)る(者)を(年)木(熊)と(り)る(り)

哥夫木 後(九)条(内)大臣
の(は)の(山)川(の)い(く)こ(土)乃
い(く)こ(土)乃(を)は(ま)ち(つ)ん

狂 花(も)星(も)を(ま)も(ら)て(枝)の(こ)を
を(の)と(り)木(と)つ(て)か(り)な(つ)て(祐)喜

年取物 正月(ふ)用(ゆ)か(ざ)り(米)年
木(其)外(来)春(用)ゆ(る)物(を)
年(内)より(貯)る(を)い(ふ)

非 九(條)夜(の)を(織)い(つ)ふ(の)を(計)六

年北市 正月(の)儀(式)ふ(用)ゆ(る)物(を)
賣(る)市(を)い(ふ)△(毬)打(賣)

△ぶ(う)く(賣)△を(ご)り(賣)△神(の)折
敷(賣)△か(や)ち(ち)ぐ(う)賣△楪(賣)△金(を)ご

賣△穂(長)賣△葉(竹)△餅(松)賣
△か(さ)り(藁)賣△神(の)皿(賣)

哥 市(に)ゆ(く)さ(る)も(む)む(る)こ(ゆ)の
い(と)く(は)る(の)い(と)れ(さ)る(人) 久(定)

狂 市(の)糸(き)れ(い)は(け)ゆ(る)に
い(う)て(る)人(の)こ(り)に(市)は(る)海

餅搗 △餅(花)△餅(む)ら(る)△賣(搗)
△青(む)ら(る)△長(寺)に(柱)餅

○正月(祝)△餅(を)年(内)つ(き)て(新)し(き)
庭(に)載(ね)く(や)り(餅)花(と)ら(る)小(ら)に

餅(を)柳(の)枝(に)數(多)つ(け)く(ん)ま(の)
か(ら)ら(依)か(る)貨(搗)の(六)繁(華)

の(市)中(に)ハ(金)瓊(并)白(を)持(て)人(の家)
は(来)り(一)白(搗)賃(何)不(ど)賃(と)取(て)

搗(と)り(三)四(十)年(前)より(む)こ(る)り
○柱(餅)と(り)ハ(肥)前(の)長(崎)と(り)年(の)

これ(の)餅(搗)ハ(終)つ(て)の(白)を(柱)巻(付)
置(正)月(十五)日(東)土(の)火(ひ)で(焙)と(登)り(と)を

〔非〕 勝つゝ音と妻よがれ 支考
際つきふ我ぢらん下女うらむるか来川

〔狂〕 湯気のくもりの中なる降つきよ
つゞきもらぬもも笑やうり 貞柳

年忌 年の暮る親類朋友 皇酒
宴とよはをのさうり 唐土小

此事あり名づけけ 濃散又 邪散
このさうり 東坡集も出さうり

〔非〕 人お教と雲せく我の心志 芭蕉
煎好ハ死ぬこのさうり 年三三 支考

〔狂〕 年忌のひらけし言のまやけ
思ひせしてさうり 森 甘露

寒聲 寒声つゝ 寒潭 譚端
奇やと 譚 者寒風小向

うく 修行せと 三線 梵音古する
者寒中に外さく 修行と

〔非〕 寒ぢ我の心 二三遍 天夢
寒ぢ我の心 二三遍 天夢

寒垢離 修験者の類 寒中に
水を浴び身をこらし

て神し 祈さく 火伏さく といふ
家々ふ水を浴させく 銭を與る

もろり 又信心の人と 立願して
ふく 浴さもろり

〔非〕 寒くやうらつと 活せて 振さる 徳夫
寒くやうらつと 活せて 振さる 徳夫

寒念佛 寒念 難の身を
行と 七墓 三珠 巡る 巡る

〔非〕 あのおれ 持木 八細 会公 支考
あのおれ 持木 八細 会公 支考

臘 臘日 蠟 臘 嘉平 清祀
臘日 蠟 臘 嘉平 清祀

の狩を臘と 臘と 臘と 臘と 臘と
臘と 臘と 臘と 臘と 臘と

を祭る 臘と 臘と 臘と 臘と 臘と
を祭る 臘と 臘と 臘と 臘と 臘と

戌日 為臘百神を祭る 漢の世ハ 戌
戌日 為臘百神を祭る 漢の世ハ 戌

日を以て 魏ハ 辰日を用ひ 晋ハ
日を以て 魏ハ 辰日を用ひ 晋ハ

ハ 丑日を用ひ 説文ハ 出今ハ 大寒ハ 小近
ハ 丑日を用ひ 説文ハ 出今ハ 大寒ハ 小近

き辰日を用ひ 此祭ハ 夏の世ハ
き辰日を用ひ 此祭ハ 夏の世ハ

と 嘉平と とい 殿の世ハ 清祀
と 嘉平と とい 殿の世ハ 清祀

○周ハ大蜡トシテ、漢ハ臘トシテ、
 風俗通の禮傳ハ臘ハ先祖と
 祭テ、蜡ハ百神を祭ル。同日に
 祭テ、祭異ニ玉燭室與出の按じり社
 日の祭れ類して社日の祭ハ民の行ふ
 所臘ハ上一人より下万民に至るまで
 先祖をまつて又諸の神を祭る。互に
 酒宴をかり祝ふ事本朝の祭れ
 如くともなり。

○本朝ハ十二月朔日ハ祝いて喰
 ふ餅を川に流し餅と云ふ此余風
 なるべし。季冬ハ水の終りなり辰
 の日ハ土位位ニ水土と祭る。又小川
 いづれともも據ありと風俗考ハ出

○哥ハ冬の狩と云ふ是なり古の習俗
 ハ皆もろこしをまつる事と云ふべし

臘日ニハ水モノ
 今年臘日凍全消シ

臘日ニハ水モノ
 今年臘日凍全消シ
 コラスキエタ 侵凌雪色還萱草

雪ヲシイテ 漏泄春光有柳條
 萱草モハエ

ヤナギノエダシヤ 縦酒欲謀良夜

オモフサニ酒ヲニチオモシロ 還家

初散紫宸朝 朝庭カラ家ヘモトツ

クツロ 口脂面藥隨恩澤

ケルクスリナドヲ 拜領 翠管銀罌下

スルミナ君ノオメグミシヤ

九霄 アライフエニシロカ子ノサカシキモ

アノクダツタモノ ノヤウニオモフ

詩 五字對句 同上

宴禮非迎氣 獵獸逢良日

今日ノ酒宴ノ礼義モ ケラカリス出トツタタタモ

陽氣ヲ迎ルガハナケレト ハヨキ日ニマフタノエヤ

司神為報功 吹籥屬令辰

冬ヲカサドルカニカ功ヲ フエキウタヤフメモヨ

ミセナサルノシヤ キ日ニヨフチシヤ

臘日 故事 勞農 漢書季冬ノ月農人 百姓ナトヲ子キフヒ

酒サカナ等ヲ賜フテ天享賜アリテ天地人ヲ祭ルノ意ナリ

時令 此部ハ十二月一月ノ時候ニカケルモノ也

寒 寒ノ入ル寒ノ入リノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

奇肌 奇肌ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

非 非ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

狂 狂ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

詩 寒夜 寒夜ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

寒夜客來茶當酒 客ガ來タ

竹爐湯沸火初紅 竹ノ爐ニ湯ヲ沸カシ

尋常一様 尋常ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

梅前月 梅ノ前ノ月ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

梅花便不同 梅花ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

急景流如箭 急景ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

童子愁水硯 童子ノ愁ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

凄風利似刀 凄風ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

佳人苦膠盃 佳人ノ愁ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

詩 寒七字對句 寒ノ七字ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

苦寒氷合分流水 苦寒ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

衣狐裘 衣ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

欲雪雲垂四面山 欲雪ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

紙窗寒 紙窗ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

酒サカナ等ヲ賜フテ天享賜アリテ天地人ヲ祭ルノ意ナリ

時令 此部ハ十一月一月ノ時候ニカケルモノ也

寒 寒ノ入ル寒ノ入リノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

奇肌 奇肌ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

非 非ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

狂 狂ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

詩 寒夜 寒夜ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

寒夜客來茶當酒 客ガ來タ

竹爐湯沸火初紅 竹ノ爐ニ湯ヲ沸カシ

尋常一様 尋常ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

梅前月 梅ノ前ノ月ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

梅花便不同 梅花ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

急景流如箭 急景ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

童子愁水硯 童子ノ愁ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

凄風利似刀 凄風ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

佳人苦膠盃 佳人ノ愁ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

詩 寒七字對句 寒ノ七字ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

苦寒氷合分流水 苦寒ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

衣狐裘 衣ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

欲雪雲垂四面山 欲雪ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

紙窗寒 紙窗ノ時ニハ寒ノ氣ハ寒ノ氣ニシテ

鶴語 晉ノ大勳三年冬寒甚シ南州ノ人ニツノ鶴ヲ見ル鶴語テ曰今年ノ寒氣ハ堯帝ノ崩セン年ノ寒ニ劣ラス晋書ニ出

① 寒氣見舞文
時維栗列寒威侵入
未審動止佳勝不佞
庸劣依舊無煩軫念
聊裁寸楮奉候

② 書習之文
天寒氣縮烈寒凜々
寒冑骨毛履况清福
清安鰥生小子吾儕
陋生

③ 同
賜高教慰問愚若之榮枯
深感至情伏審雅履万福

④ 寒甚自玉是祈
年内立春
除日立春
十二月晦日と除日と云
きり俳諧は十二月の季

⑤ 家集
夕年のまはれ
連心は春や一夜の朝か
非なるまはれ
狂何日に分るも
のゝ

⑥ 歳暮
△年は舞の奇の詞よく
季に用ゆるものハ次の條

⑦ 久不聆清誨義可奉問反
オハナシヲキカズオニヒニウスヘキハツ
オキテカクシクモウラ
カシオカスコソモウラ
リキウセイフク
ミンゴク
テハカガキニシム
キタセマカラカク
ゴトヤノモ
セイフシ
ヒウレ
ゴサイ
カウセイ
清安鰥生小子吾儕陋生

⑧ 賜高教慰問愚若之榮枯
深感至情伏審雅履万福

⑨ 寒甚自玉是祈
年内立春
除日立春
十二月晦日と除日と云
きり俳諧は十二月の季

⑩ 家集
夕年のまはれ
連心は春や一夜の朝か
非なるまはれ
狂何日に分るも
のゝ

⑪ 歳暮
△年は舞の奇の詞よく
季に用ゆるものハ次の條

⑫ 久不聆清誨義可奉問反
オハナシヲキカズオニヒニウスヘキハツ
オキテカクシクモウラ
カシオカスコソモウラ
リキウセイフク
ミンゴク
テハカガキニシム
キタセマカラカク
ゴトヤノモ
セイフシ
ヒウレ
ゴサイ
カウセイ
清安鰥生小子吾儕陋生

△今印をきりぬ。十二月廿日。願よ
 △廿日まをを歳暮といひ。△歳暮
 の賀といひ。親類朋友互に物を
 を送り合ふ。無事の終年と
 よろこびく。唐土も此事の
 こと東坡が詩にも見へり。△年の末
 と歳暮又△年の尾などいふ。△深き
 譯ゆ。廣時記拾遺。委一。面白きもの

△哥万葉三巻のねまのまはれも梅
 の花を。一。ゆゑにわ人もま。

古今同く。△年をきぬる時に
 ころ終よ。おまぬねも。人へを
 後撰。可た。こゆる。と。か。一。ふら
 ぶ。く。く。も。さ。つ。り。く。ま。ま。さ。り。か。ら

拾遺。四。き。つ。り。の。お。の。さ。年。を。き。ぬ。は
 一。と。ま。を。を。め。さ。と。ま。さ。り。き

金葉。八。わ。れ。と。ま。り。は。は。り。ふ
 ろ。お。は。い。も。名。の。さ。ら。ぬ。い。さ。り。れ

新勅撰。△。さ。は。げ。を。ふ。ぬ。と。て。ま。向
 つ。る。ま。の。さ。ら。い。△。年。の。こ。ゆ。れ。と

續後撰。人。と。ぬ。ぬ。の。外。れ。書。の。ら
 も。ま。の。と。ら。う。ふ。ら。う。の。ま。さ。り。り

新後撰。我。が。世。さ。う。き。も。果。ゆ。る。は
 け。ま。は。ち。う。つ。く。ま。も。い。と。れ。や。せん

柏玉。河。歳。暮

△年。は。さ。う。の。ま。ふ。た。て。る。ま。は
 こ。ま。さ。り。ま。ふ。人。と。ま。を。ぬ。る

雪玉。家々歳暮

ま。は。は。は。お。た。い。さ。と。ま。教。ま。ぬ
 坂。の。中。も。年。と。ま。を。ぬ。る

同。山家歳暮

△年。ま。さ。り。さ。山。う。け。の。さ。り。り。門
 ね。さ。う。ら。な。も。さ。う。さ。ら。ぬ。は。い

詞。△年。の。名。め。△年。の。別。△年。の。な。れ
 △ま。と。さ。う。△。ほ。い。の。△。年。は。△。年。年

△歳。の。と。ま。△年。の。尾。△年。の。終。△。年。の。
 年。△。い。ぬ。る。年。△。年。の。際。△。年。の。湊

△年。の。果。△。年。と。ま。い。△。年。と。ま。い。△。年。と。ま。い
 △。年。の。ま。△。年。の。ま。△。年。の。ま。△。年。の。ま

△。ら。う。づ。く。ま。△。か。と。み。さ。い。く。△。ま。は。未。だ。の

詩 歲暮季對句

同上

看雪何妨醉

傷懷殘臘去

ユキヲミテハナニホコフ

ハニヒノコツタ冬ハ尽ル

アモカマリヌ

アラオシフイモラケレド

尋春即有期

屈指早春來

ツキハルヲスベキアリ

ハルケシキヨ冬ツキル

モツヒ今ノコトニヤ

ユゴヲ折テミレバツヒ

ハルガクレ

ハルガクレ

詩 同七字對句

詩楚

歲暮陰陽催短景

冬欲半

セイホ イシキヨ モヨラス

フニホクス

天將霜雪際寒霄

歲又殘

テモツササウモツサ

トシハス

白駒過隙忽逼改

狀并註

ハク スギヒヲ

コトニハス

歲誰可脫世紛況於足下

命小酌以遣鬱悶呵々

セイニタシ ベキタス

コウシ

公私之忙乎幸偷閑責臨

公私之忙乎幸偷閑責臨

ウキソトカオイソカニカラウ

ウキソトカオイソカニカラウ

命小酌以遣鬱悶呵々

命小酌以遣鬱悶呵々

盡。歲華驚換。人皆奔忙

盡。歲華驚換。人皆奔忙

四方況於吾子屢屢紛擾乎

四方況於吾子屢屢紛擾乎

狂顧舉盃少逐風塵

狂顧舉盃少逐風塵

草木

此部も十二月一ヶ月の

冬梅

梅は春の物なり年の内より

哥六帖

梅は春の物なり年の内より

拾遺

梅は春の物なり年の内より

千載

梅は春の物なり年の内より

連

梅は春の物なり年の内より

排

梅は春の物なり年の内より

早咲梅

早梅△寒梅いつきも
早く咲ける梅をいふ

早梅ハ十月前冬至前ハ花開くと
梅譜より△寒梅ハ香なり九月

花開くと花譜より出寒梅と十月の
季ふ出しふる俳書もいふも俳

十月の梅はうり咲とさる也いづれ
も十二月や可なりん

哥 柏玉

後柏原院

あつらひもあやふくちれちあのみ
あつらひもあやふくちれちあのみ

連 雪山のこぼせやもみぢの花
宿柏

非 早鳥や後一やふ梅花 支考

早梅や序室の里れ雲をよ 蘇村

詩 寒梅

戎昱

一樹寒梅白玉條 一木ノカ
シラタマノエダノ

ヤウニミゾトナ 迥臨村野傍

溪橋 一ホク村ヤ野ニサレカ、ツテ根
モトハタニガハニニツテアル

不知近水花先發 水ガハニ
クサイタノ 疑是經春雪 抹消

春ヲヘテモキヘヌ去年ノ
ユキノ残ツタカトオモフ

臘梅 常の梅の花ふあはれ
花の形狗蠅に似たり

故に別名狗蠅梅もいふ色黄
やうり香甚し故に檀香梅も

り又色によれば淡黄梅とも
りやうり本朝ハ後水尾帝の

御宇ハ姑く朝簾より貢は
梅に似く梅はあはれと活法出

詩 臘梅詞

輕盈半度縷金囊不
似西施粉態粧

ガタノハナデキンシテクンタフクロノヤ
ウナニヨツテ西施トイフ美人ノケハヒ

タテクスガタ 鳥是來從真蠟

國 幾人爭號小黃香 八十

ハモト真臘國トイフトホヒクニカラ来
タハナジヤニヨツテオホクノヒトガワ
レイチトシヤウヒシテ小
黄香トイフ名ヲツケタ

詩 五字對句

同上

花裏重々葉

不施干点白

ハナクナカニオホクノ
葉モミエル

オビタ、シフシロイハ
ナハサカ子ドモ

枝頭點々春

別作一家春

シトウケシクノハル
エダノサキニチラフト
ハルゲシキガミエル

冬ノ末ニワシヒトリノ
春ヲミセル

探梅 冬の末小梅をたのめ
ゆかりくせり

非 手を探し梅の家を影法師

寒竹子

孟宗竹。薩州小生
竹冬笋生ば小

くしく味美なり。鳳尾竹とい
る竹も冬笋生ばれも細く

冬の笋は孟宗と名づくる
事ハ唐土具の國に孟宗と
いふ者ありて母子孝あり

今ハ竹此根小葉とは早春小笋を由
能 孟宗竹の葉のせうり貞風

母好い色雪の中小竹の
林へ行くと孝心を感ずる

冬も母は供とつゝる 貞孝子出
てて母は供とつゝる 貞孝子出

今ハ竹此根小葉とは早春小笋を由
能 孟宗竹の葉のせうり貞風

生類

此部ハ十二月一ヶ月
の生類をいひ

目鰻取

北國小島に
諏訪の海の厚氷に

下子お不火をこいた氷を破り
て其穴より取たり

妙薬 小鬼の痲又ハ省目と流
春夏よりハ悪寒を取

ハを奇切あり焙て食ふよし
非 目鰻取の書は終の富 由山

寒鯉取

其輪田鯉取。常州ミ
のこゝ水の流を濁

江近の湖に依て魚の味美
鯉を釣きたり

鵲巢うぐいす 鶏乳けいじゆ 此部ハ十二月下月の
ニシテ

必用

此部ハ十二月下月の
要用の事ニモ入ル

破	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
軍	卯ノ方	辰ノ方	巳ノ方
向	朝六ツ	朝五ツ	朝四ツ
方	午ノ方	未ノ方	申ノ方
	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	酉ノ方	戌ノ方	亥ノ方
	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
	子ノ方	丑ノ方	寅ノ方

日刻 子日世百。子ノ刻世ノ刻
事ニモ入ル用也

方角 此月家普請他行西の方角
天道西小行也

樂事 此月四時の末此の
得る折なれども

きぬくむりやどらふも
ぎ皆春待心より祝ひ
ぬどおなく或はたふが
庄園ハ梅開くわと聞か

策ハ新算よりそへ行ハ即
畫中の人ハ似たり其雅趣
はうるも夫茶室炉辺の奥尚
閑人の時を得たり

衣服式 枯色。梅。五節女。紅
白き上着。椿衣。面蕪芳裏赤
櫻。五節季より後

小用者 脂燭色衣。ぬき紅
車も有。たて紫

生華式正 寒梅。水仙。寒菊
寒牡丹。寒百合

天氣占候 此月紫の雲たて
ハ大風より赤雲ハ

こさハひあり。戌亥の雲ハ風多
。此月ハ雨のち風を生じ東
南のうぜハ久しく吹おど。虹あ
まバ人民わびらふ虹もびく

まハ大豆のやみ高。米も高し
。霧あまバ来年五穀より来年

冷る霧多々れ来年早ゆ
縮悪し。上中旬雪ふれば来年

梅雨中雨やう。寒中ふ雷のまぶ
米の價高し。又来年秋洪水あは

養生 孫真人曰此月ハ甘きは
減し苦きを増し心は

補ひ肺をとりけ腎を調理と
寒中に天門冬茯苓細末し

酒又ハ水あまく服とべし多く用
れハ薄着まよく能く寒と志の

右の外養生の法委く延壽養生
論を出し大に益あり見よべし

屠蘇方 白朮 桂心 各末 防風 一合
後製 赤蜀椒 桔梗 各末

大黃 赤烏頭 五粒 赤小豆 十粒
右の基と三角の紅の袋子入除夜ハ井底

ふりけて元日に取出し酒あけて吞
えば其の其外一切の邪氣とさる

○時珍曰白蘇ハ魁氣の名此菜切
鬼爽を屠割らる故也名づくとを

右の外包す本式菜方諸医の論
悉く丸散手引草小委し見よべし

○長生仕様傳といふ本ハ平らな小本
一冊あり人間長壽を得の法妙菜

秘傳といふ小兒誕生うそを秘
産前産後心得主生う子ハ短

命なりといふ長壽セしむ術
其外一生の間養生の志やうとの

飲食 此部ハ八人カみて巻衣し
ゆる食物をありむ

鮑味噌 生鯛の腸骨を去り
身もく味噌小和し

○非 軋味や時程は糖蜜人兒十
よきうぐん煮爛し泥のごとくと

煮凝 何魚も油ゆき魚を煮
二夜越れば煮汁永る

凝豆腐 氷とらハ水おつけ置
てむせばもこの餅とる

○非 こんあはあは入ておたり 秋光

狂 不_レ二のそと_レ溜る日_レれど_レ解
と_レぬらふ_レき_レい_レら_レん_レ隆_レ峯

寒曝 餅米を_レ製する_レ非_レ寒_レ晒
み_レけ_レは_レお_レの_レ内_レ 其_レ角

寒_レ餅 寒_レ中_レの_レ製_レる_レ餅_レか_レび
出_レる_レ味_レも_レ美_レし

狂 狂_レの_レ脈_レ等_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
左_レ方

寒造酒 非_レ酒_レを_レ雞_レふ_レみ_レぬ
白_レ面

狂 狂_レの_レ脈_レ等_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
松_レ兩

藥_レ食 鳥_レ獸_レの_レ肉_レ其_レ外_レ陽_レ物_レは
寒_レを_レふ_レて_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

非 非_レの_レ且_レぬ_レ合_レの_レ和_レる_レ野_レ水
李_レ右

鹿_レ膏 此_レ項_レ專_レら_レ鹿_レの_レ肉_レと_レ煮_レく
補_レを_レふ_レて_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

非 鹿_レ膏_レを_レ踏_レき_レて_レは_レく_レの_レ市_レ來_レ矣
益_レ有_レ

十二月飲食並料理献立

禁 葷肉の_レ猪_レ肉_レの_レ霜_レ小_レ焔_レ
物_レを_レ食_レふ_レ事_レな_レく

好 好_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
神_レと_レ破_レる

好 好_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
他_レ物_レを_レ食_レふ_レ事_レな_レく

理 理_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
九_レむ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

汁 汁_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
丸_レむ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

清 清_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
長_レい_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

鴨 鴨_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
水_レを_レ食_レふ_レ事_レな_レく

餅 餅_レの_レ並_レと_レ多_レく_レ食_レふ_レべ_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと
大_レと_レう_レも_レわ_レつ_レと

十二月 料_レ十_レ二_レ一

さより。塩引さけ
大こん。うど
生あびでん
今げ。大こん
養守

差味
生鯛角切
生鯛
こい
生あび

ふら。伝り男
ふら。伝り男
きすど。うらげ
ごぶ。うらげ
い。うらげ

白。白。精肉
たん。う。大こん
つ。く。い。い
今。の。う。い

煮物
きんこ。きん
ふ。あ。か。年。房
ひん。きん

たい。ん。ぎ
た。り。ご。あ。う
あ。ち。大。あ。つ。切。せん。ば
ゆ。い。た。き。ま。こ

白。う。伝。中。て
く。の。あ。ん
一。塩。種
生。鯛。あ。て

和會物
生。が。い。角。切
こ。い。び。き。そ
串。う。い
黒。あ。い

鳥賊
生。あ。び
ま。く。う。げ
う。う。う。げ
あ。ま。き。を

く。ま。あ。び
あ。う。う。う。げ
赤。い。い
あ。れ。を

吸物
生。龍。子
う。き。の。ま

か。い。し
ご。う。う。き。ん
鴨
か。い。し
つ。き。ん。あ。い

精汁
ひ。と。び。か。ん。甄
つ。ぶ。い。あ。た。け
あ。び。え。き
わ。ろ。う。き

く。ど。い。ど。い
ま。く。う。げ。ま。く
ま。く。ひ。ど。い
ま。く。ひ。ど。い

は。い。推。し
こ。い。ぶ。た
ま。く。う。げ
ま。く。う。げ
ま。く。う。げ

清汁
た。う。ね
こ。い。は。い
小。あ。び
あ。び。え。き

膾
あ。こ。ん。あ。あ。い
ま。く。う。げ
ま。く。う。げ
ま。く。う。げ

差味
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ

さ。の。ま。い。れ
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ

ち。推。し
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ

水。こ。い。や
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ
あ。け。ふ

煮物

にじの 皮牛蒡 漬竹子
ねんた 長い 煮物
うすく 煮物
さきく 煮物

やわぐ 煮物
長い 煮物
煮物

和會物

煮物
煮物
煮物

あけえん 煮物
うが 煮物
白き 煮物

豆 煮物
ゆりね 煮物
煮物

ゆりね 煮物
ゆりね 煮物
ゆりね 煮物

時鳥

ひよ 煮物
か 煮物
か 煮物

魚

ほら 煮物
ひそ 煮物
煮物

ふら 煮物
たろ 煮物
煮物

まき 煮物
煮物
煮物

青物

ほろ 煮物
か 煮物
煮物

まほ 煮物
煮物
煮物

まれ 煮物
煮物
煮物

